

MfG_J_Several_gates_of_castles_and_others (C) 春日正利
 ～ 近隣のお城由来の薬医門、その他、さまざまな門

| 城、豪商・豪農、神社の門 | 場所 | 作成ストーリー |
|--------------------|--------|---------|
| 西福寺薬医門 (与板城) | 長岡市内 | ○ |
| 敬光寺薬医門 (長岡城) | 長岡市内 | |
| 西本願寺与板別院表門 (与板城) | 市内(与板) | ○ |
| 与板・恩行寺山門 (与板城) | 市内(与板) | |
| 吉田・今井家裏門 (三根山藩) | 燕市 | ○ |
| 小国横沢・山口邸の正門 (豪農) | 市内(小国) | ○ |
| 越路塚之山・長谷川邸の正門 (豪農) | 市内(越路) | |
| 摂田屋・サフラン酒の門 (豪商) | 長岡市内 | |
| 弥彦神社の大鳥居、随神門 | 弥彦村 | ○ |
| 悠久山・蒼紫神社の高明門・無疆門 | 長岡市内 | ○ |
| 摂田屋近く、定正院裏手の神社の門 | 長岡市内 | |
| 定正院 本堂前の、冠木門と石柱門 | 長岡市内 | |

1. 長岡市内で見ることができる薬医門
 西福寺薬医門、敬光寺薬医門
2. お城由来の門、豪農・豪商の門
 - (1) 吉田・今井家裏門(三根山藩の正門)
 - (2) 西福寺薬医門 久須美家拝領の与板城御門
 - (3) 与板・浄土真宗本願寺派新潟別院 与板城大手門
 - (4) 与板・恩行寺山門
 - (5) 豪農家の門 小国・山口家、越路・長谷川家
3. 弥彦神社の大鳥居、随神門
 - (1) 大鳥居、ほか
 - (2) 弥彦神社 拝殿前の随神門
 補足 神宮寺と別当寺
4. 悠久山・蒼紫神社の高明門(無疆門)
 - (1) 中庸にある「至誠」と、蒼紫神社によせた忠精公の言葉
 - (2) 山本五十六記念館にある「至誠」
 - (3) もうひとつの悠久山
5. 定正院の冠木門、門柱の門ふたつ
6. 門についての雑感
 摂田屋・サフラン酒の門、定正院裏手の神社の木々を例に

1. 長岡市内で見ることができる薬医門

西福寺薬医門

長岡市渡里町

浄土真宗本願寺派寺院

戊辰の役で残った与板城の門のひとつ。
城の陣屋門であった薬医門が、あちこち所有
が替わった後、西福寺が保存に手を挙げた。



敬光寺(けいこうじ)薬医門

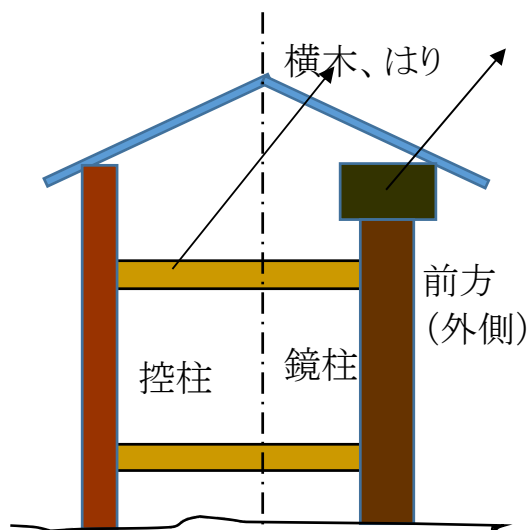
長岡市巻島一丁目10番地

真宗大谷派寺院

長岡城の薬医門を、1841年、
藩主の許可を得て、図面通り
に建造された。



薬医門のいわれは、かつて医者の門として、門の脇に木戸をつけて、扉を閉めても、四六時中患者が出入りできるようにしたことからも云われています。また、城郭の一部の門の構造にも使われてきましたが、この場合には、矢の攻撃を食い止める「矢食い(やぐい)」を意味したとも云われています。



基本は前方(外側)に2本、後ろ(内側)に2本、計4本の柱で屋根を支えます。特徴は、屋根の中心の棟が、前の柱と後ろの柱の中間(等距離)に位置せず、やや前方にくることです。従って前方の2本の柱が、本柱として後方のものよりやや太く、加重を多く支える構造です。

～ 感想

「薬医門」という定義を、機能から考えるか、構造から考えるか、によりいくつかの変化した門のパターンがあると思います。

「薬医門」の定義を、機能から考え、『門の脇に木戸をつけ、扉を閉めても、四六時中の出入りを可能にした』というスタイルにすると、テレビで見る時代劇の奉行所の門も、薬医門の類になります。構造からでは、いろいろな門の共通点、相違点が複雑にことから、分類が難しいのでは、と感じています。

2. お城由来の門、豪農・豪商の門

西本願寺与板別院表門
(与板城の大手門 高麗門造り)



吉田・今井家裏門
(三根山藩の正門)



越路塚之山・長谷川邸の正門



(1) 今井家裏門(三根山藩の正門)

今井家の石垣の内側

手入れの行き届いた庭には、立派な盆栽、名石らしき岩。 平らな苔の面、しっとりとしたヤマ苔の庭園は、弥彦神社(*1)を思わせる、行き届いた手入れは感動ものでした。 三根山藩から借金のカタに取ったという城門が、屋敷裏の西川に面しています。

西川で運んだ米俵を、この門から、勾配のついた厚板上を滑らせ、近くの納屋に運び入れたといわれ、豪勢なものです。西川は、新潟の内野まで続いており、また当時、ここから新潟湊まで、自分の土地を歩けたそうで、陸上と海上交通の双方を手中にしています。

しかし、お殿様から城門を取り上げるなんてことが、あったでしょうか。

三根山藩から借金のカタに、という話は、それだけ藩の財政が厳しく、殆ど担保にならないような城門を、「どうか、これで」、と頼み込まれて、仕方なく頂戴したと考えるべきだと思うのですが・・・。

(*1) 弥彦神社は、どこも手入れが行き届いていますが、とりわけ、宝物館前に位置した旧本殿の跡地は、はだしで歩けるなら歩きたい美しさです。 位置的には、御手洗川にかかる玉の橋の延長線上です。

(2) 西福寺薬医門は久須美家拝領の御門

1) 西福寺(長岡市渡里町)にある山門(薬医門)はかつて久須美家が拝領した、与板城大手門です。山門には二枚の棟札があり、そのうちの一枚には文政6年(1823)の6月18日に久須美秀三郎の高祖父、23世・七左衛門祐之と久須美小弥太祐吉が拝領したことが記され、もう一枚には天保10年(1839)に旧越路町、岩塚中沢の山本助三郎喜徳の名が記されているそうです。

天保10年の棟札は山本家へ譲渡されたことを示すものです。

久須美家がこの門を誰から拝領したかは棟札に記されていないようです。山門は1961年の第二室戸台風により、倒壊したままになっていたのを、当時の西福寺の住職が文化財保護のため、山本家より購入移築したとのこと。下賜主や山本家への譲渡の事情については、ありますが、西福寺の歴史資料は空襲で全て焼失し、詳細は不明とのこと。

2) 久須美家23世太宰祐之は、京師からの帰京の節は長岡の「枿屋」を常宿としていたといひます。宿泊すると、玄関に張りめぐらしたそうです。その幔幕を見て、長岡藩城主牧野公自ら挨拶に出向かれたとのことで、久須美家当主との交流が偲ばれます。

(3) 与板・浄土真宗本願寺派新潟別院 与板城大手門

～与板城大手門 の説明板を抜粋、参考にしました。

与板城は戊辰戦争で焼失しましたが、大手門と切手門は戦火を免れました。大手門は1871年の廃藩置県の年に、当浄土真宗本願寺派与板別院に移築され、別院の第一の門となりました。

門柱を礎石の上に直接建て。門扉は枿の中に縦に厚板を張り、鉄板を使用しています。この門は移築前には、新町から長町(家中)に抜ける旧大手の通りにあり、厳重な虎口であったそうです。

与板別院と与板藩との関係は深く、別院の建立は、藩主井伊直経が1830年発願により始まったもので、その起工は明治三年であります。

旧与板別院歴史年表

天保 4(1833)年・・・本山から許可され、御本尊様与板へ。

明治 4(1871)年・・・戊辰戦争の戦火を逃れた与板城大手門を移築。

平成13(2001)年 旧本堂解体と起工。上棟式。

平成15(2003)年 4月 ……落慶法要

(4)与板・恩行寺山門 （与板城の切手門を明治四年に移築したもの）
この、出入りのチェックを厳しくした与板城の「切手門」は、切妻、棧瓦葺、高麗門形式で、本柱の背後に控え柱を設け、その間に小屋根を設けています。高麗門形式とは、鏡柱と控柱を一つの大きな屋根に収める薬医門の構造を簡略化したものとされます。

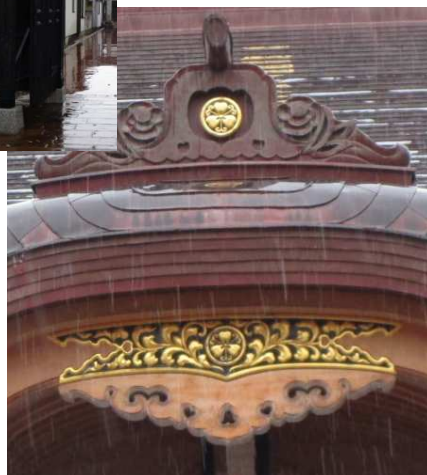
与板・恩行寺山門 について、ネット情報を含めて説明します。
恩行寺長岡市与板町与板に境内を構えている真宗大谷派の寺院。
山号は月岡山。本尊は阿弥陀如来(寛文3年:1663年製作)。
恩行寺の創建は永禄2年(1559)に開山したと伝えられています。
恩行寺山門は旧与板城の切手門を移築したもので、慶応4年(1868)に行われた戊辰戦争の兵火により与板城が焼失した際にも焼け残り、明治4年(1871)の廃藩置県で与板藩の廃藩に伴い廃城になると、当寺に払い下げとなりました。与板藩主井伊家縁の寺院であることから鬼瓦には井伊家の家紋である井桁(井筒)紋が掲げられています。

恩行寺は歴代領主、与板藩主から帰依され、寺宝に藩主の膳碗や書簡、与板城新築城郭図などを所有しています。

当初は現・徳昌寺近くの蔵小路にありましたが、江戸時代中期の享保5年(1720)に与板藩御蔵造営にあたり、現在地に境内を移し、近年本堂(木造平屋建て、寄棟、銅板葺、平入、桁行8間、正面1間向拝)が新築造営されています。正面の破風の上の鬼瓦、下の懸魚に、ともに魔除けの「猪の目」が見られます。



左図は切手門
右図は切手門の後ろ



(5) 豪農家の門

1) 小国横沢・山口邸の正門 機能としては薬医門のよう



小国横沢・山口邸の正門の板は厚いです。
お城にも使えるような頑丈さです。

2) 越路塚之山・長谷川邸の正門

建造物の多くは享保元年(1716)建築とのことで、この門も、
300年前の建物ということになります。



長岡市ホームページより

茅葺の、どっしりした構造です。

長谷川家は文政元年(1818)以後の上山藩支配時、大庄屋格として
三島町の山田家、小国町の山口家とともに、上山藩の財政を支えたと
云われています。山口家、長谷川家とも、藩の出先機関の機能も
持っていたのでしょうから、家の門も、それに相応しいものである
必要があったのだと思っています。

3. 弥彦神社の大鳥居、随神門

(1) 大鳥居、ほか



日本一の大鳥居(高さ30m)
 厳島神社と同じ両部式(りょうぶ)。
 上の額は十二畳(5.4m*3.6m)、
 昭和57年の新幹線開業記念に建造。

長岡市ホームページより

巨大な2本の柱の各々途中から袖柱を出して、合計4本の足で2本の主柱を支えるように見える、4本足の鳥居の形式です。

両部鳥居には、中央本体の鳥居の柱を支える形で稚児柱(稚児鳥居)があり、その中央の笠木の上に屋根があります。

両部とは密教の金胎両部(金剛・胎蔵)をいい、神仏習合を示す名残。

大日如来を智徳の面から開示した金剛界と、理から説いた胎蔵界。金胎両界。



弥彦神社 一の鳥居



弥彦神社 二の鳥居

補足 神宮寺と別当寺

一の鳥居も、両部鳥です。まさに、神仏習合です。神仏習合の象徴として、寺院と神社の中間的存在の神宮寺があります。弥彦神社では、もともとは紫雲山・龍池寺という大寺院が弥彦山の山麓に存在したそうで、これが弥彦神社の神宮寺だったのです。そして明治の廃仏毀釈後、現在、弥彦神社の北側にある「宝光院」が、弥彦神社の神宮寺の末寺とのこと。

(国上寺は別当寺として弥彦神社とも関係が深いそうです。

別当寺と神宮寺の区別は難しそう。)

～ ちなみに、長岡の北部、蔵王の金峰神社の別当寺が、安禅寺。
 神田の安善寺(山号は蔵王山)は、安禅寺の塔頭寺院とのこと。

そのほか、長岡藩の祈願所である平潟神社の別当寺が、昔に存在していた智慶院で、それが、ちけんさまの呼び名の名残り。

宮内の高彦根神社が宮内の広大な社領を有し、別当寺として西福寺、西入寺などが担当していたが、御館の乱の以後に衰微。渡里町の西福寺さんは以前、宮内にあったということですので、こちらと思います。

(2) 弥彦神社 拝殿前の随神門

昭和十五年(1940)に、紀元二千六百年を奉祝して建立されました。門内の左右には紀伊国熊野から伊夜日子大神様に随行してきた大神様の、宮居を警護する神様、長気(おさげ・向かって右側)・長邊(おさべ・向かって左側)の兄弟神を祀っています。

※「ずいしん」は一般的に「隨身」と表記しますが、彌彦神社では伝統的に「随神」と表記。するとのこと。

長気が口を開いているのに対し、長邊は閉じています。”あ・うん”です。現在でも質実剛健、力の強い武神として弓矢・刀を身につけ、邪悪なもの全てをはね返し、神門をお護りしています。



4. 悠久山・蒼紫神社の高明門（無疆門）（春日） ～ 中庸の「至誠」、悠久山・蒼紫神社の高明門（無疆門）

(1) 中庸にある「至誠」と、蒼紫神社によせた忠精公の言葉

至誠無息（しせいむそく）は、中庸章句第二十五章の冒頭の句です。「至誠は息むこと無し」と訓読みされ、第二十五章（章の分け方は諸説）の全体では、この上ない「誠の心」をもって生涯を貫きなさい、という意味、悠久とは、永遠というより、万物を成り立たせる偉大なはたらきを言う言葉、そして高明とは、万物を覆い尽くす大空を示すという意味とされます。尚、この第二十五章の前の章でも、至誠は知と仁の総和と言及しており、中庸には、この他にも随所に「至誠」に言及しているところがあるようです。

「蒼紫神社由緒略記」によれば、天明元年(1781)に現社殿の造営竣工の祝典に、忠精公が「中庸」より語を選び、山を悠久、表参道を高明、裏参道を無疆(むきょう)と命名されたとされています。

その参道の名が、拝殿前の門の名称となり、(表の)高明門と(裏の)無疆門となったわけです。そして、その名の由来が、中庸章句第二十五章の最期の句の「博厚配地、高明配天、悠久無疆」の中で、示されています。



悠久山、高明門、無疆門、至誠という、なんと深い関連を有した言葉であり、まさに、「万物を限りなく覆い尽くす大空のごとき、至上の誠」、です。

(2) 山本五十六記念館にある「至誠」

山本五十六記念館に、五十六さんの「至誠」の書があります。そして明治天皇御製という、五十六さんの書も、その近くに展示されています。

「ときおそきたがひはあれど貫かぬ こと無きものは誠なりけり」

Any act out of the sincerity would be accomplished successfully.
もうひとつ。

「いかならむときにあふとも人はみな まことの道をふめと教へよ」

Walk a road of the truth at any time you encounterd trouble .

これらも、「至誠」と同じ心を詠んだものと思いますが、この中庸の句に示された「至誠」の意味するところを知ると、もともとは為政者としての志、覚悟として味わうべきものなのかも知れません。

このように、五十六さんが「至誠」を中庸の中の言葉として意識したのも、もしかしたら堅正寺住職と親しく話している中だったのではないかと、とも思いました。

堅正寺の山号も「悠久山」であり、悠久山と中庸の強固な縁を感じます。

元々、堅正寺初代橋本禅巖住職は、五十六さんの長岡中学同期で親友の二代駒形宇太七が、魚沼の雲洞庵でスカウトした高僧です。（*1）

五十六さんの「至誠」については、この他にも、いろいろなトピックスがあります。悠久山だけでなく、どこでもガイドできるよう、考えたいと思います。

以下は、中庸章句第二十五章の全文です。

故至誠無息。不息則久、久則徴。

故に至誠は息むことなし。息まざれば則ち久しく、

久しければ則ち徴（しるし）あり、

よって、この上ない誠の心のはたらきは止まるときが無い。

止まることなく長く続けば、その効果があらわれることになる。

徴則悠遠、悠遠則博厚、博厚則高明。

徴あれば則ち悠遠なり、悠遠なれば則ち博厚、博厚なれば則ち高明なり。

（このように誠は）その効果があらわれると、はるか遠くまでゆきわたる、

はるか遠くまでゆきわたると、それはひろびろとして厚く行なわれる

ひろびろとして厚く行なわれると、それは高々として高明に

あふれて行なわれることになる。

博厚所以載物也。高明所以覆物也、悠久所以成物也。載（の）する

博厚は物を載する所以なり。高明は物を覆う所以なり。悠久は物を成す所以なり

博厚とは、万物をその上に載（の）せるはたらきによるものであり、

高名とは、万物をその上に覆（おお）うはたらきによるものである、

悠久とは、万物を成立させるはたらきによるものである。

高明所以覆物也。悠久所以成物也。

高明は物を覆う所以なり。悠久は物を成す所以なり。

高明とは万物を覆う（大空の）はたらきによるものであり、

悠久とは万物を成立させるはたらきによるものである。

博厚配地、高明配天、悠久無疆。 無疆 （むきょう）

博厚は地に配し、高明は天に配し、悠久は疆（かぎ）りなし。

博厚であるということは大地のはたらきと一致することであり

高明であるということは大空のはたらきと一致することであり

それが悠久とは、その成り立つ世界が無限無窮ということである。

（この上ない「誠の心」とは、そのようなものなのである。）

如此者、不見而章、不動而變、無為而成。

此の如き者は、見わさずして章らかに、動かずして變じ、為す無くして成る。
 だから至誠を身に備えている者は、ことさらに事を為そうと右往左往
 しなくても、自然と世の中を治める事が出来るのである。(それ故に至誠を
 身に備えている聖人君子は人々から尊び敬われるのである。)

以上は、下記を参考にしたものです。 漢文には句読点を追加しました。

<http://fukushima-net.com/sites/meigen/1534>

<https://open.mixi.jp/user/17180778/diary/1940308230>

(3) もうひとつの悠久山

～ 橋本禅巖住職と新井石禅師との出逢いに想うこと

曹洞宗の寺院に、大雄山最乗寺という大寺院があるそうです。
 神奈川県南足柄市大雄町にあり、道了尊の名で親しまれ、境内は
 樹齢500年以上という杉の美林2万本がある。曹洞宗では北陸永平寺、
 鶴見の総持寺に次ぐ大寺院とのこと。

ここで、橋本禅巖住職は、新井石禅師と出逢った。

堅正寺初代橋本禅巖住職は、最乗寺におられた新井石禅師に師事、
 石禅師の総持寺入山に付き添って総持寺でも師事。

石禅師が総持寺管主を経て示寂の後、禅巖師は総持寺を去り、
 魚沼の雲洞庵に禅道場の指導者として入山し、さらに研鑽につとめた。

ちなみに、雲洞庵は若い時に新井石禅師が方丈をされた地。

そのことがあって、禅巖師は、生涯の師・石禅師との別れの後の学び
 の場として雲洞庵を選ばれたのだと思う。

そのとき雲洞庵に、二代駒形宇太七が新たに造成中の禅道場の教師を
 探しに訪れ、そこで禅巖師を紹介され、方丈として迎えた。

これらの、いくつかの出逢いがなければ、その後の駒形十吉さんの活躍も、
 違ったものになったでしょう。数々の五十六語録も残らなかったかも知れ
 ないと思うと、なんという、ご縁でしょうか。

5. 定正院の冠木門、門柱の門ふたつ

建造物の山門をもつ寺院もありますが、門柱のみの寺院も多いです。長岡市鷺巣町にある定正院には、参道の階段を上った左手に冠木門、門柱型の門の二つの門があり、その向こうに本堂が見えます。



参道の「一の門」_最初の門 (表)



参道の「二の門」_二番目の門 (表)



参道の「一の門」_最初の門 (裏)



参道の「二の門」_二番目の門 (裏)

「一の門」_最初の門は、冠木門のスタイルです。
参道の「二の門」_二番目の門 は、門柱のスタイルです。
それぞれ脇に、脇柱、袖門を従えた、凝っ形式が、見どころです。

本堂の破風を飾る懸魚に、猪の目があしらわれています。
これも、見どころです。

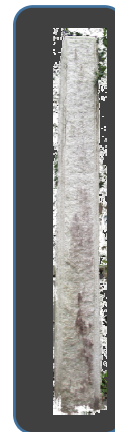
6. 門についての雑感 ～摂田屋・サフラン酒の門、定正院裏手の神社の木々を例に

門(もん)とは元来家・屋敷地の出入口をいうが、空間的な視角から門の内外を門(かど)といった奈良時代以降、家自体、集団など、種々の語義を派生した。

門の初期スタイル、門柱



二本の柱の門
(サフラン酒の通用門)



現存する
向かって
左側の門柱
地中に、同程度
の長さの柱半分
が埋まっている。

冠木門

そこに横木



摂田屋では、屋内型。
サフラン酒の外に
星野本店にも。
それぞれ土間から
蔵への入口に
立派な冠木門がある。

冠木門 からの展開

神社

2本の横柱の上に、まっすぐな木材を乗せる
「神明(しんめい)鳥居」型と、
2本の横柱の上に、両端が上に向かって反った
木材を乗せる「明神(みょうじん)鳥居」型

寺院

楼門、四脚門、八脚門 など

館

城郭

旗本屋敷や奉行所、豪商などに立派な門
城内、城郭の周囲の出入りの門にも。

一般家屋

門柱の例



もともとの門(かど)

(定正院の裏山の
神社の二本の木の門)

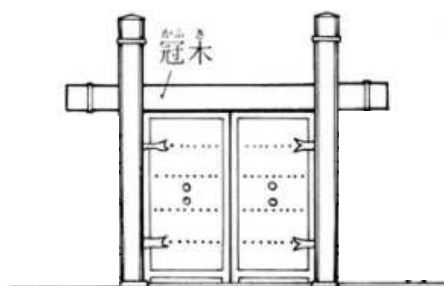


サフラン酒・正門の門柱と副柱
(工事中で、門扉は撤去。
副柱は守衛用か?)

神社の二本の木が、神社の門の基本形だと思います。もともとは前後の四本で結界を表わし、前の二本のみで、門になったと思うのです。定正院の裏山に、小さな神社があり、二本の大木（おそらく、モミノキ）が、門のように立ってしまして、これが、門のはじまりだと思っています。

冠木門とは

門柱に冠木(笠木かさぎ)を通して、貫(横木)をもつものも含む門の総称である。現在は屋根のないものをいうことが多いが、基本形は屋根がない。文献的には室町時代までさかのぼるが、できたのは鎌倉時代ころとされる。



定正院の本堂前の一の門が、冠木門の形式（勝手に名づけています）

ガイド時の一言

与板城の門は現存するが、長岡城の門は、図面をもとに建造したものを除き、残っていない。

上山藩分地の豪農家の館の門の大きさ
燕市・吉田の今井家裏門の由来
～ 江戸期の豪農と藩との関わり

弥彦神社の門、一の鳥居、二の鳥居、大鳥居
～ 神仏習合と、神宮寺、別当寺

悠久山・蒼紫神社の高明門（無疆門）の名と、寄せた意味

もうひとつの悠久山 悠久山堅正寺
～ 橋本禅巖住職と新井石禅師との出逢いに想うこと

定正院の冠木門、門柱の門ふたつ

懸魚に猪の目
与板・恩行寺の新築造営の本堂正面の破風の上の鬼瓦、、
下の懸魚に、ともに魔除けの「猪の目」
鷲の巣町・定正院本堂の破風を飾る懸魚に、猪の目

門のお話

<https://www.eonet.ne.jp/~kotonara/monnoohanasi.htm>